マンドのシェアが急激に拡大しており、アマゾンプライムの日本での会員数は８００万人を超えていると推測されています。

映画「あらうんど四万十」はアマゾンプライムのプログラムとなっておりますし、本県四万十市出身の漫画家安倍夜郎さんが原作の漫画「深夜食堂」はドラマ・映画化され、ドラマ最新シリーズは、現在ネットフリックスで世界１９０カ国に配信されており、韓国・中国ではリメイク版も制作され大変な人気となっております。このような状況を考えますと、今後の海外からの誘客を考えたとき、映像コンテンツの持つ情報発信力は決して小さくないと考えます。

また、本県が取り組んだ２０１３年の「楽しまんと！はた博」、そこから始まった四万十映画祭は、３回目にもかかわらず、業界では夕張国際ファンタスティック映画祭と肩を並べる存在と評価されており、ジェトロ、日本貿易振興機構がバックアップする唯一の地方映画祭と伺っております。昨年度末に行われました第３回目では初めてコンペ部門が設けられ、受賞作品を海外に送り出す登竜門の役割をしております。高知ロケではない作品、高知の企業がかかわっていない作品、そんな作品でも、すばらしい日本の作品を本県から海外に送り出すという四万十映画祭のスタイルは、まさしく幕末維新のころ、我々の先輩達が脱藩してまでも世界に対する日本の将来を見据えて行った行動そのもので、高知じゃなければあり得なかった映画祭だと思います。

先ほど少し触れましたが、四万十映画祭で公開された「センターライン」という作品は、この映画祭において観客賞を受賞し、中国と配給契約が結ばれて既に結果も出ておりますし、国内の若手監督からは、日本で一番配給に近い映画祭として、作品を出品したい映画祭とも言われております。

このように、本県には、交通インフラの拡充、本県の魅力を伝える映像コンテンツの存在、ハード面とソフト面ともに世界につながるコンテンツの利用方法の基礎もできました。２０２０年東京オリンピック後を見据えた取り組みとして、今こそ力を注ぐべきときではないでしょうか。

人口減少先進県の本県では、交流人口の拡大が今後の県政の大きな柱の一つであることは間違いありません。先人が育んできた本県の文化、歴史、自然、食は、海外の方々にも自信を持って喜んでいただけるものです。今まで行ってきた数々の事業の積み上げをさらに飛躍させるためにも、観光、文化、産業、教育など関連部署で情報共有を行いながら、本県の魅力を発信し続けていくことが重要と考えられます。

Q そこで、映画やドラマのロケの誘致活動を行うフィルムコミッション活動を強化することが重要であると考えますが、これまでに御提案させていただいた官民が協力した受け入れ体制づくりの進捗も踏まえ、観光振興部長のご所見をお伺いいたします。

A 観光振興部長　映画やドラマの誘致は、国内外に向けた本県のＰＲ効果はもとより、ロケ地めぐりなどの観光誘客や大規模な撮影の際の宿泊などを中心に、さまざまな経済効果を生み出す可能性があると考えています。こうしたことから、民間の方々との協力によって本県のフィルムコミッション活動が強化できますことは、大変心強いことだと考えています。

フィルムコミッション活動の強化に向けては、県内の民間の方々が、映画などの制作をサポートする組織の立ち上げを目指されており、県としましてもこれまでに関係者の方々と意見交換を行ってまいりました。

関係者の方からは、誘致の際のロケ地情報のデータベース化を初め、撮影に関する地元との調整などにノウハウを持つスタッフの確保や、編集機材と移動車両の準備などに取り組むことで、効果的なフィルムコミッション活動が可能になるとのアイデアをいただいています。こうしたアイデアを受けて、県からは、お互いの役割と責任の分担や民間組織の活動に必要な資金の調達方法など、具体的な仕組みの検討を重ねていく必要があることをお伝えしています。

今後とも、受け入れ体制づくりに向けた協議を継続しまして、官と民との協力のもとでのフィルムコミッション活動の強化につなげていきたいと考えています。